

平成二九年度 宝仙学園高等学校 入学試験問題 国 語 ㉠

【一】次の各文の傍線部の漢字の読みがなを答えよ。

- (1) 深紅の優勝旗。 (2) 自叙伝を著す。 (3) 若干疑問な点がある。
(4) 経済の格差を是正する。 (5) 寝食を忘れて勉強した。

【二】次の各文の傍線部のカタカナの部分を漢字に改めよ。

- (1) 期末考査をジツシする。 (2) タイキユウ性に優れた素材。 (3) 役所からニンカが下りた。
(4) 野草をツむ。 (5) ツイオクにふける。

【三】次の小説を読んで後の問いに答えよ。(特に指示のない限り、字数には、句読点・記号を含む。)

吉をどのような人間に仕立てるかということについて、吉の家では晩餐後毎夜のように論議せられた。またその話が始った。吉は牛にやる雑炊を煮きながら、ひとり柴の切れ目からぶくぶく出る泡を面白そうに眺めていた。「やはり吉を大阪へやる方が好い。十五年も辛抱したなら、暖簾が分けてもらえるし、そうすりゃあそこだから直ぐに金も儲かるし。」

そう父親がいうのに母親はこう言った。

「大阪は水が悪いというから駄目駄目。幾らお金を儲けても、早く死んだら何もならない。」

「百姓をさせば好い、百姓を。」

と兄は言った。

「吉は手工が甲だから信楽へお茶碗造りにやるといいのよ。あの職人さんほどいいお金儲けをする人はないっていうし。」

そう口を入れたのはませた姉である。

「そうだ、それも好いな。」

と父親は言った。

母親だけはいつまでも黙っていた。

吉は流しの暗い棚の上に光っている硝子の酒瓶が眼につくと、庭へ降りていった。そして瓶の口へ自分の口をつけて、仰向いて立っていると、間もなくひと流れの酒の滴が舌の上で拡がった。吉は口を鳴らしてもう一度同じことをやってみた。今度は駄目だった。で、瓶の口へ鼻をつけた。

「またッ。」と母親は吉を睨んだ。

吉は「へへへ。」と笑って袖口で鼻と口とを撫でた。

「吉を酒やの小僧にやると好いわ。」

姉がそういうと、父と兄は大きな声で笑った。

その夜である。吉は真暗な涯のない野の中で、口が耳まで裂けた大きな顔に笑われた。その顔は何処か正月に見た獅子舞いの獅子の顔に似ているところもあったが、吉を見て笑う時の頬の肉や殊に鼻のふくらはぎまでが、人間のようにびくびくと動いていた。吉は必死に逃げようとするのに足がどちらへでも折れ曲がって、ただ汗が流れるばかりで結局身体はもとの道の上から動いていなかった。けれどもその大きな顔は、だんだん吉の方へ近よって来るのは来るが、さて吉をどうしようともせず、何時までもたつてもただにやりにやりと笑っていた。何を笑っているのか吉にも分からなかった。がとにかく彼を馬鹿にしたような笑顔であった。

翌朝、蒲団の上に坐って薄暗い壁を見詰めていた吉は、昨夜夢の中で逃げようとして藻掻いたときの汗を、まだかいていた。

その日、吉は学校で三度教師に叱られた。^②

最初は算術の時間で、仮分数を帯分数に直した分子の数を訊かれた時に黙っていると、「そうれ見よ。お前はさつきから窓ばかり眺めていたのだ。」と教師に睨まれた。

二度目の時は習字の時間である。その時の吉の草紙の上には、字が一字も見あたらないで、宮の前の高麗狗の顔にも似ていれば、また人間の顔にも似つかわしい三つの顔が書いてあった。そのどの顔も、笑いを浮かばせようと骨折った大きな口の曲線が、幾度も書き直されてあるために、真っ黒くなっていた。

三度目の時は学校の退けるとときで、皆の学童が包を仕上げて礼をしてから出ようとすると、教師は吉を呼び止めた。そして、もう一度礼をし直せと叱った。

家へ走り帰ると直ぐ吉は、鏡台の抽出から油紙に包んだ剃刀を取り出して人目につかない小屋の中でそれを研いだ。研ぎ終ると軒へ廻って、積み上げてある割木を眺めていた。それからまた庭に這入って、餅搗き用の杵を撫でてみた。が、またぶらぶら流し元まで戻って来ると俎を裏返してみたが急に彼は井戸傍の跳ね釣瓶の下へ駆け出だした。

「これは甘いぞ、甘いぞ。」

そういいながら吉は釣瓶の尻の重りに縛り付けられた櫂の丸太を取りはずして、その代わり石を縛り付けた。暫して吉は、その丸太を三、四寸も厚味のある幅広い長方形のものにしてから、それと一緒に鉛筆と剃刀とを持って屋根裏へ昇っていった。

次の日もまたその次の日も、そしてそれからずっと吉は毎日同じことをした。

ひと月もたつと四月が来て、吉は学校を卒業した。

しかし、少し顔色の青くなった彼は、まだ剃刀を研いでは屋根裏へ通い続けた。そしてその間も時々家の者らは晩飯の後の話のついでに吉の職業を選び合った。が、話は一向にまとまらなかった。或日、昼餉を終えると親は顎を撫でながら剃刀を取り出した。吉は湯を呑んでいた。

「誰だ、この剃刀をぼろぼろにしたのは。」

父親は剃刀の刃はをすかして見てから、紙の端はしを二つに折って切ってみた。が、少し引かなかった。父の顔は嶮しくなった。

「誰だ、この剃刀をぼろぼろにしたのは。」

父は片袖をまくって腕を舐めると剃刀をそこへあててみて、

「いかん。」といった。

吉は飲みかけた湯を暫く口へ溜めて黙っていた。

「吉がこの間研いでいましたよ。」と姉は言った。

「吉、お前どうした。」

やはり吉は黙って湯をごくりとどへ落とし込んだ。

「うむ、どうした？」

吉が何時までも黙っていると、

「ははア分った。吉は屋根裏へばかり上っていたから、何かしていたに定ってる。」

と姉は言って庭へ降りた。

「いやだい。」と吉は鋭く叫んだ。

「いよいよ怪しい。」

姉は梁の端に吊り下っている梯子を昇りかけた。すると吉は跣足のまま庭へ飛び降りて梯子を下から揺すぶり出した。

「恐いよう、これ、吉つてば。」

肩を縮めている姉はちよつと黙ると、口をとがらせて唾を吐きかける真似をした。

「吉ッ！」と父親は叱った。

暫くして屋根裏の奥の方で、

「まアこんな処に仮面が作えてあるわ。」

という姉の声がした。

吉は姉が仮面を持って降りて来るのを待ち構えていて飛びかかった。姉は吉を突き除けて素早く仮面を父に渡した。父はそれを高く捧げるようにして暫く黙って眺めていたが、

「こりゃ好く出来とるな。」

またちよつと黙って、

「うむ、こりゃ好く出来とる。」

といつてから頭を左へ傾け変えた。

仮面は父親を見下して馬鹿にしたような顔でにやりと笑っていた。

その夜、納戸で父親と母親とは寝ながら相談した。

③「吉を下駄屋にさそう。」

最初にそう父親が言い出した。母親はただ黙ってきいていた。

「道路に向いた小屋の壁をとつて、そこで店を出さそう、それに村には下駄屋が一軒もないし。」

ここまで父親が言うと、今まで心配そうに黙っていた母親は、

「それが好い。あの子は身体が弱いから遠くへやりたくない。」といった。

間もなく吉は下駄屋になった。

吉の作った仮面は、その後、彼の店の鴨居の上で絶えず笑っていた。無論何を笑っているのか誰も知らなかった。

吉は二十五年仮面の下で下駄をいじり続けて貧乏した。無論、父も母も亡くなっていた。

或る日、吉は久しぶりでその仮面を仰いで見た。すると仮面は、鴨居の上から馬鹿にしたような顔をしてにやりと笑った。吉は腹が立った。次に悲しくなった。が、また腹が立って来た。

「貴様のお蔭で俺は下駄屋になったのだ！」

吉は仮面を引きずり降ろすと、鉈を振るってその場で仮面を二つに割った。暫くして、彼は持ち馴れた下駄の台木を眺めるように、割れた仮面を手にとつて眺めていた。が、ふと何んだかそれで立派な下駄が出来そうな気がして来た。すると間もなく、吉の顔はもとのように満足そうにぼんやりと柔ぎだした。

（横光利一「笑われた子」の全文による）

*手工が甲だから……工作の成績が、最上位（甲・乙・丙・丁）だから、の意。

*跳ね釣瓶……井戸から水をくむ道具。柱の上に横木を渡し、その一端に石を、他端に釣瓶を取り付けて、石の重みで

釣瓶をはね上げ、水をくむもの。

*昼餉……ひるめし。昼食。

問一 波線部 A「仕立てる」・B「口を入れた」・C「骨折った」・D「嶮しくなった」の本文中での意味をそれぞれ記号で答えよ。

A 仕立てる

- ア 布地を裁って衣服に縫い上げる。
- イ 乗り物を特別に用意する。
- ウ 材料を整えてこしらえる。
- エ 教育して完成した状態にする。
- オ 理由をでっち上げてある状態にする。

B 口を入れる

- ア 不用意にしゃべる。
- イ やつと話せるようになる。
- ウ 脇から言葉をはさむ。
- エ 二人の話が食い違わないようにする。
- オ 大それたことを言う。

C 骨折った

- ア 大いに力を尽くした。
イ 仕事が面倒くさかった。
ウ 組み立てた。
エ 利益を吸い上げた。
オ 面倒を見た。

D 峻しくなった

- ア のぼるのに難しかった。
イ きつい感じになった。
ウ あぶない感じになった。
エ いやな感じになった。
オ 憂いを含んだ。

問二

傍線部①「吉は必死に逃げようとするのに足がどちらへでも折れ曲がって、ただ汗が流れるばかりで結局身体はもとの道の上から動いていなかった」とは、吉のどのような様子を表しているか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 必死で逃げようとするがどちらの方向に逃げればよいかわからず、何もできずにいる様子。
イ 必死に足を動かすが足を骨折してしまい、その痛みのために汗をかいて苦しんでいる様子。
ウ 必死で足を動かすが同じ場所から動けず、「笑う顔」から逃れられずに苦しんでいる様子。
エ 必死で逃げようとするが、「笑う顔」への恐怖で動けなくなってしまう、汗をかいている様子。

問三

傍線部②「学校で三度教師に叱られた」とあるが、二度目に吉が叱られた理由を簡潔に説明せよ。

問四

傍線部③「吉を下駄屋にさそう」とあるが、父親はどうしてそう考えたのか。その理由を二つ、答えよ。

問五

傍線部④「すると間もなく、吉の顔はもとのように満足そうにぼんやりと柔ぎだした」とあるが、ここに至るまでの吉の心情を説明した次の文の空欄 i ～ iii に適切な語を考えて入れよ。
(但し、抜き出しではない。いずれも三字程度で答えること。)

二十五年前の夢で見た「笑う顔」のことで、それを模して作った仮面のことは忘れ、親が決めた下駄屋という仕事を i 続けてきた。久しぶりに仮面を見たことをきっかけに、ii を受け入れるだけの自分の生き方に iii と悲しみを覚え、衝動的に仮面を割ったが、割れた仮面を手にとると改めて意識は下駄屋へと引き戻され、今の日常を受け入れる心境へと戻っていた。

問六

傍線部 X「母親だけはいつまでも黙っていた」とあるが、このとき母親はどんなことを考えていたと考えられるか。本文全体をふまえてわかりやすく説明せよ。

【四】次の文章を読んで後の問いに答えよ。（特に指示がない場合、句読点も字数に含む。）

ふだん、よく使っている言葉でも、あらためて考え直してみると、明確のように思われている意味がしだいにはばやけ、本来、何をあらわしているのか、わからなくなってくるものがしばしばある。ということは、私たちは言葉を無意識のうちにしやべったり、書いたりしているということなのであろう。つまり、言葉は慣用しているうちに、深い意味を失っていくのである。言葉は、^①たんなる言葉にすぎなくなってしまうのだ。

「^②もつたいたい」という日本語の意味は、日本人ならだれでも知っている。しかし、では、その意味をはっきり説明してほしい、といわれたなら、容易に答えられない。すぐに思い浮かぶのは、不経済な、ということである。まだ使えるのに捨ててしまうなんて、もつたいたいじゃないか、という場合、あるいは、時間がもつたいたい、などというとき、人びとは品物や時間か、その価値どおりに用いられない、**A**、浪費されるのを惜しむ気持ちをこの言葉で表現しているわけである。

だとすれば、もつたいたい、という言葉の意味は、ものの価値が価値どおりに使われない、ということなのであろう。だから、もつたいたいお言葉、などと謙遜^{けんそん}している場合——そうした表現は近ごろではあまりきかれなくなってしまったが——それは、私にはそのような言葉に見合うだけの価値がありません、という意味なのである。

さらに、もつたいたい、には、神仏や貴人に対して不敬であるという意味もある。が、こうした意味も最近ではすっかり影が薄くなり、もつたいたい、といえば、もっぱら不経済なという意味をあらわすようになった。日本人の意識がそれだけ物質的、経済的になったのであろう。

では、もつたいとは何か。漢字で書くと「勿体」となるが、おそらく「物体」^{もつたい}の当て字であるという。つまり、もつたいとは物の本体、実体のことなのである。したがって、もつたいたいとは、そうした物の本体を失わせてしまうことであり、物の本質を見失うことといってよい。

B、そのような実体もないのに、あるように見せかけることを、「もつたいぶる」「もつたいをつける」「もつたいらしく振る舞う」などというわけである。そして、その意味が、重々しく、えらそうに体裁を飾ることであるとすれば、もつたい、すなわち物の本質、本体は、日本人にとって、重々しく、威厳に満ちたものとしてつねに表象されてきたといってもいいであらう。

③ それでは、もつたい（物体）のものの（物）とは何なのか。日本語のなかで、解き明かすのにいちばん厄介な言葉が、ものという概念である。だから、どの辞書も、かなりのスペースをさいて、その意味を分析しているが、

C、いまひとつ、充分とはいいがたい。なぜなら、ものという日本語は形を特ったいわゆる「物」だけではなく、同時に、「われわれが考えることのできるすべて」（三省堂版『国語辞典』）をふくんでいるからである。ものを「者」と書けば、人間までもであり、さらに、「そんなことをいうものではない」といった表現に見られるものは、ことに対応し、こととおなじようにある事態を抽象化した概念として用いられている。だから、ものとは「ものごと」という言葉からも察せられるように、こと（事）と同列の、きわめて広い意味の領域を持つているのである。

D、つぎのような用法を考えてみるといい。

「どんなもん（もの）だい」「人間はかくありたいものだ」「ものには限度がある」「先輩のいうことはきくものだ」「そんなところによく行けたものだね」「目にもいわせる」「こいつはものになる」「ものは試し」「そこが知りたいものだ」……

こうした表現に使われている「もん」あるいは「もの」はいったい何をさしているのか、どれもはっきりと説明できない。さらに、ものは、こんなようにも用いられる。

「もの知り」「ものいり」「物語」「飲みもの」「もの言い」「物腰」「もの好き」「（命あつての）もの種」「ものぐさ」「もの書き」……さらに、「もの、静か」「もの、珍しい」「もの、すごい」「もの、悲しい」「もの、足りない」「もの、ものしい」「もの、見高い」「もの、思い」「もの、本」「もの、まね」「もの、取り」……また、「もの、のあわれ」「もの、の道理」「もの、の怪」「もの、の見事に」「もの、の数」……。

と見てくると、日本語の「もの」とは、さきの定義にもあつたように、およそ人間が考えることのできるすべてをさすで見ているのかもしれない。

精神的なものと物質的なもの、そのどちらを、より根源的なものと見るか、によって、古来、哲学は絶えず論争し、対立してきた。¹ヨーロッパの哲学史は、このふたつの立場の対決の歴史といってもいいほどである。心的なものを根源的と考える哲学は、観念論、あるいは唯心論^④と呼ばれ、それに対して、物質がすべての基礎であると主張する哲学は、^⑤唯物論といわれた。だが、この対決はいまではあまり鮮明ではなくなっている。というのは、物質と精神、意識の関係は、容易に解決つかないからである。物と心とはどのような因果関係にあるのか、いや、そもそも物質とは何か、意識とはいかなるものかが、依然として根源的に解明されていないのだ。だから、物と心のどちらに優先権を与えるかは、最終的には人それぞれの信念による以外にないことになる。そんなわけで、唯物論と唯心論との対決は、哲学ではいわば“休戦状態”にあるといってもよからう。

むろん、日本でも唯物論的な世界観に立つ人と、唯心論的な哲学に立脚する人は、それぞれの思想を展開してきた。しかし、日本ではヨーロッパのように、そのふたつの見方が激越な形で対決するということとはなかった。ということは、日本人は物か心か、という一元的な考え方に、あまり固執しなかったということであろう。したがって、日本人はある場合には、きわめて唯物論的であり、また他の面では、たいへん唯心論的なのである。私はそのような日本人の世界像を、「もの」という日本語に見る思いがする。

日本語の「もの」とは、いうまでもなく、目に見える、そして手で触れることのできる物質を意味するが、しかし、けっしてそれだけではなく、「物」のなかには「物」の本質をつくっている何かがあると日本人は考えてきた。いや、現代でもそう考えている。だから、ものとは目に見える物質にとどまらず、それに内在する価値、本質、実体をふくめて表象されているのである。それを何よりも雄弁に語っているのが「もつたいたい」という言葉であろう。もつたいたいの「もつたいたい」とは――前記のように「勿体」という漢字が当てられているが――本来は「物体」であるうとされている。つまり、ものの体であり、ものの本体、本質をさしているのだ。

ところで、もつたいの「体」であるが、たいというのも、おなじように表面的に見える形を意味すると同時に有様、姿、状態をさし、さらに本体、本質、実体までをふくんでいる。こうした用法から考えると、日本人は現象と本質の区別をヨーロッパ人のように、あるいは古代ギリシア人や、インド人のように厳密に区別しなかったと見てよい。いいかえれば、日本人は現象から本質に至るまでを、もの(物)という言葉で包み、たい(体)という語で表現したのである。さらに別言すれば、日本人は X のなかに Y を見、Z の姿を現実のもののや体に見る、ともいえよう。

(森本哲郎「もつたいたい」の一節による)

問一 空欄AとDに入るのに最も適当な語句を次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア たとえば イ だから ウ つまり エ しかし

問二 傍線部①「言葉は、たんなる言葉にすぎなくなってしまうのだ」とは、どのようなことか。本文中の言葉を使って説明せよ。

問三 傍線部②「もつたいたい」の意味について説明している箇所を本文中から二五字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を答えよ。

問四 傍線部③「もつたいたい(物体)のもの(物)とは何なのか」に対する筆者の考えとして適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「もの」は形を持ったいわゆる「物」だけでなく、「われわれが考えることのできるすべて」を含んでいる。

イ 「ものごと」という言い方があるように、「もの」は「こと」と同列の、きわめて広い意味の領域を持

っている。

ウ 「もの」と心や精神とのどちらに優先権を与えるかの議論は、最終的には信念の問題で、いわば休戦状態にある。

エ 「もの」は目に見える物質にとどまらず、それに内在する価値、本質、実体をふくめて表象されている。

問五 傍線部④「唯心論」・⑤「唯物論」とは何か。それを説明している箇所を、本文中からそれぞれ過不足なく抜き出せ。

問六 空欄X・Y・Zに入るのに最も適当な語句を次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。(但し、同じ記号を複数回使ってもよい。)

ア 勿体 イ 本質 ウ 物質 エ 現象 オ 精神

問七 傍線部I「ヨーロッパの哲学史」とあるが、これに対して日本の哲学史はどのように進んでいったと考えられるか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 日本人は唯物論か唯心論かという一元的な考え方にこだわらなかったため、このことを考える哲学者は両方の立場から誰も一人出なかった。

イ 日本人は唯心論と唯物論という二つの立場を厳密に区別したので、二つの見方はまったくぶつかりあうことのない「休戦状態」となった。

ウ 日本人は最終的に人の考え方は人それぞれの信念によると考えているため、唯物論と唯心論の対決はそれほど激しいものとはならなかった。

エ 日本人は唯心論と唯物論のどちらを選ぶかといった考え方にこだわらなかったため、この二つの考え方が激しく対立することはなかった。

問八 本文を読んだ上で、今の社会やあなたの身近なところでの「もったいないこと(もの)」を具体的に紹介し、それに対するあなたの考えを二〇〇字以内で述べよ。

【五】次の設問に答えよ。

問一 次の各文を《》内の指示に従って書き換えよ。

(1)母はまだ外出中で、家にいらつしやいません。 《傍線部を正しい使い方の敬語に》

(2)私は 一生懸命に 係の 仕事に 取り組む 友人を 手伝った。
《文節の順序を入れ替え、「一生懸命」なのが「友人」であることが明らかな文に》

(3)私は日本人選手の海外での活躍を見ると、勇気を与えてくれる。
《一部の表現を変え、主語と述語のねじれがない文に》

(4)こつきょうのながいといんねるをぬけるといちめんうみがひろがった
《漢字やカタカナ、句読点を用いてわかりやすい文に》

(5)今朝のニュースは、私を幸せな気持ちにさせた。
《表現や文の構造を変えて、同じ内容で「私は」で始まる文に》

